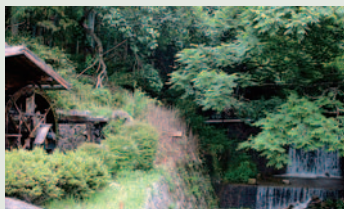


木曽川



木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
秋号では木曽谷の南の玄関口、中津川市山口・馬籠から、
その歴史や砂防事業を中心に、
歴史ドキュメントでは、近世の御手伝普請を特集します。



岐阜県中津川市山口・馬籠地区

ふるさとの街・探訪記

農業と宿場町を中心に 歴史を重ねた、山口・馬籠

エリア・リポート

地域社会の未来を創る砂防事業と橋梁整備

気ままにJOURNEY

文人墨客たちの 心のふるさを歩く

歴史ドキュメント

御手伝普請の変遷とその特性

TALK&TALK

木曽三川の流れとともに

民話の小箱

竜宮乙姫岩の伝説

国土交通省中部地方整備局
木曽川下流河川事務所



農業と宿場町を中心に 歴史を重ねた山口・馬籠

山口・馬籠のあらまし

平成一七年二月、長野県山口村は県境を越えて中津川市と合併しました。山口・馬籠は木曽谷に入る人口にあり、まさに平野部から山地へ入る山の口の村でした。信濃国と美濃国の境をなし

流れ、東日本系・西日本系の文化圏の接点の一つとなっています。

集落は山口地区と馬籠地区に大別されます。山口地区は木曽川左岸の段丘上に点在し、馬籠地区は、馬籠・峠・荒町の三つが中山道に沿って集落を形成しています。温帯と暖帯が接する気候

により豊富な植生に恵まれています。年平均気温も二三・五度と比較的温暖で降雪も少ないことから農業を中心に成長し、近年までは米と繭が主要産物でした。

太古の山口・馬籠

先史時代の遺跡は、先土器時代一箇所、縄文時代三〇箇所、弥生時代五箇所、古墳時代八箇所があります。古墳が発見されているのは木曽谷では山口だけで、山ノ神古墳・千人塚古墳の二つがあります。

大和朝廷は、東国への勢力伸張のため、東山道を開いています。木曽路の起



岐蘇山道推定路(長野県史より)

源は東山道ですが、美濃から信濃へ通じるこの道には、最大の難所 神坂峠(現長野県下伊那郡阿智村)が控えていたため、八世紀初めには馬籠一妻籠一御殿(三留野)一与川と木曽谷を北上する岐蘇山道を開き、以後、両ルートが使われるようになりました。

縄文後・晩期の川原田B遺跡から出土した遺物



馬籠は東山道の周辺村落として開けはじめ、岐蘇山道開通の頃より次第に住民が定着していったようです。

律令制下の山口・馬籠は美濃国恵那郡に属していたと推定されます。

木曽氏と島崎氏

戦国時代になると、木曽氏が勢力を伸ばして木曽地方を領有し、一時は東濃地方まで勢力を拡大。甲斐を中心

に勢力を伸ばしていた武田信玄は娘を木曽

遠山氏の支配下にあった中世

馬籠村の名が文献に現れてくるのは鎌倉時代の初期で、近衛領の遠山荘に含まれていました。「吾妻鏡」元暦二年(一一八五)五月一日の記録には、源頼朝が木曾義仲の異母妹・菊姫に「遠山庄内一村」を与えたとあります。馬籠には菊姫が兄義仲の冥福を祈って創建したと語り伝わる法明寺の廃寺の跡があります。

室町幕府の御番帳に遠山馬籠左馬介のといった名前が見られるように、美濃の苗木遠山氏の勢力下にあったようです。

平成一七年二月長野県山口村は岐阜県中津川市と合併。中津川市山口・馬籠として、新たな歩みを踏み出した。山口・馬籠は、木曽谷の南玄関。律令時代、木曽谷を北上する岐蘇山道が整備された頃から次第に住民が定着していったようです。山口は木曽谷随一の米の生産地でした。馬籠は中山道六九宿の一つ馬籠宿として発展。現在は国道一九号が山口地内を北上、交通の要路として重要な役割を担っています。



空から見た中津川市山口



空から見た中津川市馬籠

義昌に嫁がせ木曾への進出を目論み、一方、美濃を本拠に木曾の覇権を狙う織田信長も木曾氏との接触を図ってきた。しかし長篠の合戦(天正三年・一五七五)の大敗で武田氏に陰りが見えると木曾義昌は織田氏の傘下へ。天正一〇年(一五八二)、木曾義昌は東濃地方に対する固めとして、馬籠の西方にある馬籠城を修築して、島崎監物を守将にしました。同年、本能寺の変が勃発、信長死後の覇権をめぐる天正一二年(一五八四)に小牧・長久手の戦いが起きますが、この時木曾氏の配下の島崎氏は羽柴(豊臣)秀吉方として参戦。徳川連合軍に攻められ、妻籠城へ逃れました。当時の妻籠城主は木曾氏の家臣の山村良勝。彼が率いる将兵はよく戦い、連合軍を撃退しました。こうして木曾氏は戦功を挙げましたが、秀吉は木曾義昌を追放。慶長三年(一五九八)木曾家は断絶します。

木曾氏の家臣であった島崎氏は馬籠村の開祖といえる家柄で、明治の文豪・島崎藤村の祖先にあたります。系図によると相模三浦氏の出自で、永正一〇年(一五二三)重綱の代に木曾氏に仕え、弘治元年(一五五五)妻籠に住し、永禄元年(一五五八)重通が馬籠に移って馬籠島崎氏の初代となり、二代重長は郷士となって馬籠の代官職に任ぜられ、九代勝房の代から本陣・庄屋・問屋を兼ねてこの地方の名家となりました。

木曾谷随一の米の生産地

太平の江戸の世になると、山口・馬籠は幕府領となり、元和元年(一六二五)から尾張藩領に属しました。木曾川段丘に位置する山口は気候温暖、土地も肥沃で農業が主体であったため、山村ながら、山村特有の木年貢は課せられず、米年貢だけでした。当時は木曾谷随一の米の生産地であり、また紙漉職が四軒あったといわれています。この山口地区は上下二郷に分かれており、上山口の諏訪神社は慶長一六年(一六一一)の創建。



山口諏訪神社本殿



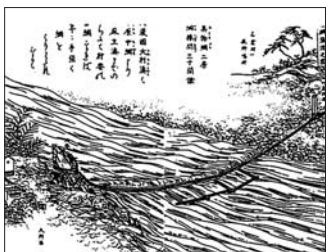
山口村絵図(江戸中期)

神社の棟札に「恵那郡木曾内山口村」と書かれており、この時点で木曾の国籍は信濃国か美濃国かはきりせず、信濃国筑摩郡と確定したのは元禄一五年(一七〇二)国絵図調査改訂の時であったといわれています。

大川狩と川並番所

山口地区には黍生の渡し場や材木の川狩・筏輸送の管理や盗木を防ぐための川並番所、出水による流木を留める杭場、揚げた材木を保管する土場や綱場があり、役人の監視小屋、人足の休憩小屋が木曾川の兩岸の数箇所に設置されていました。

上山口の浜居場に川並番所が置かれ、大川狩の時期になると美濃国錦織奉行所より同心役人が来て常駐しました。村ではこの役人たちの宿泊接待に苦労したことが庄屋文書から知ることができま。また、洪水の際には材木の流失を防ぐために村民の出役が要請されました。安永六年(一七七七)の洪水



綱場

時には、一六五人が出役しています。

大川狩は岩倉郷川合渡(木曾福島地内)より美濃国加茂郡錦津村の錦織(岐阜県八百津町)の綱場まで約二〇里を「管流」して材木を運搬する方法。その間木曾川には難所がありますが、現在の関西電力賤母発電所付近は急流で曲折し深淵をなしており、川狩人夫がたびたび溺死する危険な難所でした。

寛保二年(一七四二)尾張藩は危険防止を願うこの場所に不動尊像を安置しています。このほか山口地内には三箇所に祀られたといわれますが、現存するのは賤母一箇所だけとなりました。

馬籠村と馬籠宿



峠の集落

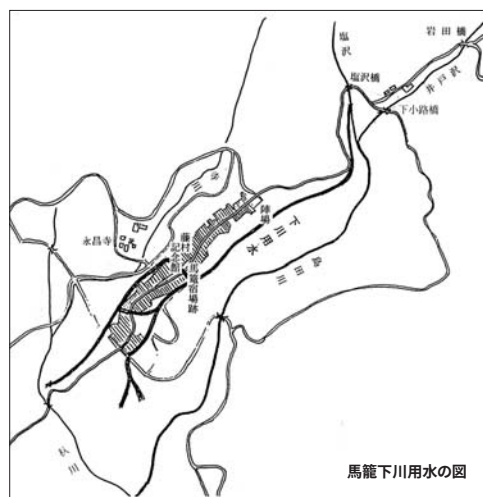
馬籠地区の中心の馬籠村は、慶長六年(一六〇二)徳川家康が制定した中山道六九駅の一つ、馬籠宿を中心とした集落です。温暖地であったため、諸作物もよく育ち、桑・楮なども収穫されたようです。馬籠村の峠集落は牛方衆と呼ばれ、牛を用いて荷物運搬に従事する者が多かったようです。彼らを木曾では岡船と呼び、遠くは善光寺まで荷送りして駄賃稼ぎしました。安政三年(一八五〇)峠の牛方衆が団結して中津川の問屋・角屋

十兵衛の不正に対抗し、ついに牛方衆が勝利しました。島崎藤村はこの史実を小説『夜明け前』に取り上げています。

馬籠宿と下川用水

馬籠宿は馬の背のような坂道の両側に家屋が立ち並んだ宿場で、木曽路最初の宿駅です。東の高札場と西の枅形の入口まで、家屋が連なる線状の集落です。その構成は現在の町並みにも残されています。

馬籠宿の唯一の用水は下川用水です。愛宕山の東方から発した一の沢・二の沢・三の沢が合流して塩沢となりますが、下川用水は塩沢の塩沢橋の下方中山道下辺から取水、中山道下の斜面に水路を通して宿場へ飲み水などの生活用水を送っていました。しかし、宿場裏のラバ谷などの急斜面では水路建設が不可能だったので、二町余の斜面に笕樋を掛けて通水していました。ところが大雨が



降ると、崖が崩れせちかくの笕樋の腕木が倒れてしまい、通水が止まることもしばしばでした。そのたびごとに大変な修繕になり、宿場の人だけでなく馬籠村全部の人が協力して修復しました。

その被害はたびたびのことでしたから、手を焼いた宿では一計を案じ、隧道を掘り抜いて通水することにしました。天保一四年（一八四三）のことです。しかしその隧道も万全ではなく、大雨が降れば隧道は潰れ抜けて水が吹き出してしまいう有様、多額の経費をかけて修理をしてもまた潰れという状況の繰り返して、結局また元通りの笕樋に戻ってしまいました。

水の確保は馬籠宿の宿命的な課題です。明治七年（一八七五）、ラバ谷に木樋を架設、明治一九年（一八八六）には腐朽した木樋を架替するなど、後に表川用水が整備されるまで、下川用水の維持管理に馬籠の住民は腐心してきました。

島崎正樹・広助の山林解放運動

明治政府は、新時代にふさわしい国力を確立するために地租改正をはじめ諸制度の改革を断行しました。その中でも林野制度の改革は、長い間山林に依存してきた木曾谷住民の生活を圧迫することとなりました。江戸時代尾張藩は、木曾山のうちの一部を「巢山」「留山」とし、住民の立入を禁止して樹木を保護しましたが、これ以外の山は「明山」と称して住民の立入を自由としていました。ここで住民は家作用材・薪炭材、その他、田畑の肥料としての芝草刈りや、また山に入つて枅・団栗・栗を拾い、生活の糧としていました。ところが明治政府は「明山」も官有地として立入りを禁止してしまつたのです。

この政策に木曾谷の住民の不満は募り、「山林開放運動」を展開。馬籠村の庄屋・島崎正樹は木曾谷村々の代表となり、明治四年には「明山への立入り、停止、木制度の撤廃」を筑摩県に嘆願しています。しかし再度の嘆願は聞き入れられず、運動の首謀者とされた島崎正樹は「今日限り戸長免職と心得よ」とされたため、正樹は失意の中で運動から身を引きました。

島崎正樹は藤村の父、代表者を失つた運動は休止しますが、その後の運動の中心人物となるのが島崎広助、妻籠本陣の養子となつた人で藤村の実兄です。広助の私財をなげうった哀願運動は明治三八年（一九〇五）御下賜金下付の決定という一応の解決をみました。正樹の山林解放運動より三〇余年の歳月が過ぎていました。

個性あふれる地域づくりを目指して

国道一九号の下に広がる水田地帯（通称青木平）は明治四〇年（一九〇七）、近隣町村に先駆けて耕地整理事業が行われ米の増産が図られた地域です。

その一方交通網の整備も着々と進行之、明治三五年（一八九二）山口と三留野（長野県南木曽町）を結ぶ賤母新道（後の国道一九号）が、明治四四年（一九一一）には木曾谷を通過する中央線が開通しました。中山道から国道一九号や鉄道へこのような交通路の変遷により馬籠宿は寂れますが昭和三〇年代から木曽路観光ブームにより、現在では年間九〇万人余が訪れる観光地に成長。こうした観光資源を生かした地域づくりを積極的に進めるとともに、野菜のハウス栽培、果樹の栽培など新しい農業生産を奨励。また、林業においては檜や杉の優良材生産の他、竹林整備によつて、竹・竹炭の産地化をも計画しています。さらに生活環境面では、名古屋方面への交通の利便性の向上に伴い、若者定住住宅や宅地分譲をはじめ、各地区の実情に応じた下水道の整備などを実施。個性あふれた地域づくりを目指して、住民と行政が一体となつた多彩なプロジェクトを行っています。



若者定住住宅

まごめ浄化センター

■参考文献
『山口村誌』上巻 平成七年
山口村誌編集委員会
『角川地名大辞典』長野県 角川書店

AREA REPORT

中津川市
山口・馬籠地区

地域社会の未来を創る 砂防事業と橋梁整備

木曽谷は土砂災害の多発地帯。山口・馬籠地区も集中豪雨により、土石流や土砂災害が発生。そのため木曽川への土砂流出の軽減を主目的に、砂防事業が実施され、近年では景観や自然環境に配慮した砂防施設が建設されました。また、蚕生の渡しから弥栄橋へ、山口と坂下を結ぶ交通の要路の変遷も紹介します。

【山口・馬籠の砂防事業】 溪流環境と共生する山口・馬籠の砂防施設

先人の偉業が光る 木曽の砂防事業

木曽川上流域にあたる木

曾谷南部の地

形は急峻かつ

複雑で、その

斜面や平地に

は集落が点在

し、木曽川に

沿ってJ・R中

央本線や国道

一九号が走っ

ています。これ

らの地域では

出水の都度土

砂が流出し、

災害が繰り返

されてきまし

た。明治時代、

島田川床固工群



木曽三川の改修を手がけたオランダ人技師、ヨハネス・デ・レーケもこの地を訪れたとき、その荒廃ぶりを目の当たりにして、砂防事業の必要性を力説しています。

木曽谷の入口、山口地区は木曽川に

直接流れ込む急勾配の溪流が並流し、

降雨のたびに土砂災害を繰り返してき

た地域、分水嶺の高十幾山の裏側には、

明治十三年（一八八〇）明治天皇の天覧

に浴した「大崖砂防堰堤」があります。

デ・レーケの指導により誕生した「大

崖砂防堰堤」は、木曽南部の砂防事業の

原点です。今も脈々とデ・レーケの砂防

思想は受け継がれています。

馬籠地区を襲った土砂災害

馬籠地区は馬籠宿を中心に開けた集

落です。明治三十七年（一九〇四）七月一

日に発生した集中豪雨で、馬籠地区

は多大な被害を受けました。被害は馬

籠地区の中でも峠集落に集中。水死者四名、罹災戸数一二戸、橋梁流失一一橋、道路破壊一五ヶ所、田畑流失二〇町歩など、小さな集落が大打撃を受けました。その被害を今に伝えるのが、峠の水車塚です。碑文は島崎藤村の揮毫「山家にありて 水にうもれた蜂谷の家族四人之記念に」と災害の悲劇が刻まれています。

馬籠地区の砂防事業

こうした土砂災害を防ぐため、馬籠

地区では昭和十二年（一九三七）から木

曽川直轄砂防（落合川砂防）の一環とし

て工事が開始されました。第二次世界

大戦中、事業費は縮小されましたが、戦

後、治山治水事業が公共事業の中心課

題となり、落合川の各支川でも主要地

点に砂防堰堤が施工されました。観光

客でにぎわう旧中山道の南玄関・馬籠

宿などの上流に砂防堰堤が完成し、土

石流から貴重な文化財を守っています。

また、平成二二年度には、近隣の地域環

境になじむよう、景観や「自然環境」に

配慮した島田川床固工群が完成しています。

島田川は馬籠峠を水源とした落合川の支川です。島田川床固工群は、河床・河岸の侵食を防止するために、島田川中流に設置されました。また、この地区では初めて

階段式魚道が導入

されました。床固工

群の一部にイワナやヤマメなど木曽川

に生息する美しい溪流魚のための通り

道が設けられたのです。階段式魚道は、

隔壁によって階段式のプールをつくり、

これを連続させる構造で、日本の魚道

でもっともポピュラーな型式です。調査

では、溪流魚の遡上が確認されていま

す。

自然環境型護岸は、自然に配慮した

もの。床固や護岸の表面に人工的なコン



自然環境型護岸



階段式魚道

クリートではなく、現地にある自然の転石が有効利用されています。このほか周辺では、観光客や近隣住民の憩う親水公園の整備が進められています。

山口を襲った集中豪雨の爪痕

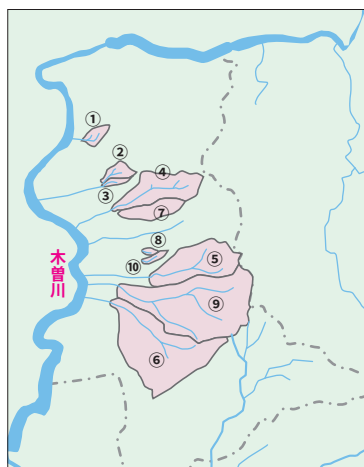
背後に高土幾山・賤母山を背負う山口地区は、これらの山を水源とする大小六つの沢が西の木曽川に向けて、河岸段丘を侵食して流れています。昭和二十八年（一九五三）七月二〇日、木曽南部を中心とした集中豪雨は、この地域的地形的特性が招く自然災害の危険性を現実のものとなりました。

この年、木曽谷は六月からの降雨が例年になく多く、地盤はゆるんだ状態が続き、河水も増水状態にありました。七月一九日から降り続いた雨は最後のトドメをさす形になり、二〇日早朝、各溪流からの土石流が下流を襲いました。大又沢新梨沢橋梁をはじめ各所の橋が次々と流され、鉄道・国道を埋め、人家を壊し、通信及び交通を遮断。山口地区は文字通り陸の孤島となりました。

た。地区内の流失・冠木埋没耕地は実に七二町歩に及び、中でも造成の新しい開拓地の被害は多大。南部の下山地区では、作付一九町歩の耕地が傾斜地のため一三町歩にわたって耕土を流出加えて木曽川護岸の決壊、河川護岸の流失、橋梁の陥没・流失、家屋の全壊など、被害総額は当時の額で三億円強にも及び、村の全域に悲惨な被害の爪痕を残しました。

山口地区の砂防事業

図に示すように山口地区には土石流危険渓流が多く存在しています。その中でも大沢川・前野沢・本沢川は下流



旧山口村土石流危険渓流一覧〔木曽川水系木曽川左岸〕

渓流番号	渓流名	所在地	流域面積〔ha〕	危険渓流
①	本沢川	第二区	0.12	○
②	無水沢	第三区	0.13	
③	折付沢	第三区	0.05	
④	大又沢	第四区	0.67	
⑤	新梨沢	第九区	0.70	
⑥	前野沢	第十一区	1.08	○
⑦	宮洞沢	第六区	0.29	
⑧	深沢川	第七区	0.02	
⑨	大沢川	第十一区	2.01	○
⑩	清水	第八区	0.06	

しかし木曽川直轄砂防工事が進む落合川流域とは対照的に、整備は遅れていました。そのため、昭和二十八年の集中豪雨をはじめ、昭和五〇年（一九七五）など災害は多発しています。

昭和五〇年七月の集中豪雨による「七夕災害」では、山口村（当時）をはじめ上松町・大桑村・南木曽町で土砂災害による大きな被害が発生しました。この災害を契機として、四町村は共同して国による砂防事業の推進を要請していきます。この時、当時の山口村は四町村の意見とりまとめに尽力しました。こうして、昭和五三年から木曽南部直轄砂防事業が開始されました。

木曽南部直轄砂防事業の基本構想は、木曽川本川への土砂流出を軽減することを基本とし、その中で、地域防災、JR中央本線や国道一九号などの基幹交通の保護を目的としています。

山口地区では、平成二年完成の大沢川第一砂防堰堤



本沢川第一砂防堰堤



前野沢第一砂防堰堤

堰堤に始まり、本沢川第一砂防堰堤前野沢第一砂防堰堤等が整備され、地域に暮らす人々の生命と財産が自然の脅威から守られています。

■参考文献
『山口村誌上下巻 平成七年
山口村誌編集委員会
『島田川床固工群 多治見工務事務所
『木曽南部直轄砂防事業（二〇周年史）
平成五年 多治見工務事務所』

【山口の橋梁整備】

黍生の渡しから弥栄橋へ、山口と坂下を結ぶ要路

山口の暮らしを支えた二つの渡し

山口と坂下・田立間の木曽川の往来は、古くから渡船に頼ってきました。

上流から麻生の渡し、黍生の渡し（きぶぎ）がそれぞれ、筏渡しが行われていました。筏渡しができる場所は、流れの穏やかな砂地のある浜が適しています。

黍生の渡し場は最もよい条件を備えていたところ。山口発電所の上流約百mの位置にありました。この場所の江戸



黍生の渡し

時代の川幅は六〇間（二〇八m）、水深一丈約二mでした。

二つの渡しは濃飛街道へ通ずる重要な交通手段として往来が多くなり、江戸時代後期には舟が使われるようになりました。桶屋・鍛冶屋・石屋・医師などの往来があり、筏場の屋号を持つ家も

あります。元禄時代の宗門改の文書を見ると、山口・坂下間の婚姻が常に行われていたことがわかります。

明治時代の交通網整備

明治二十四年(一八九二)岐阜県を走る国道・山口便道が、翌年、長野県を走る国道・賤母新道が整備され両国道が山口で接続すると、新しい道路は完全に一本化され、岐阜と長野を結ぶ新交通文化の第一歩が踏み出されました。

賤母新道は長野県の主要道路七本の内の「第八路線」。長野県読書村から山口を結ぶ国道で、当初は馬籠峠越えを計画していましたが、馬籠峠が急坂で距離も長いことから、賤母溪谷に新道を開削することとなりました。

山口便道は従来の馬籠峠へ向かう道路に代えて、岐阜県の落合から現在の落合大橋を渡り落合川沿いに木曽川に出て、木曽川沿いに山口に通ずる国道です。この山口便道の開通により、馬籠を通行する人は絶えて、この区間の中山道は名実とともに幕を降ろしました。

画期的な岡田式渡船を採用

こうした道路の整備により、山口・坂下間で木曽川を渡る黍生渡船も大いに利用され、舟も次第に大型化していきます。明治二十四年、これまで個人の営業だった麻生・黍生の渡しは、内務省の許可を得て村営に、明治三十八年(一九〇五)には県営となりました。

明治四一年(一

九〇八)国鉄中央線の部分開通により坂下駅が営業を開始すると、山口から坂下に

向かうため渡船を利用する人はますます増えました。

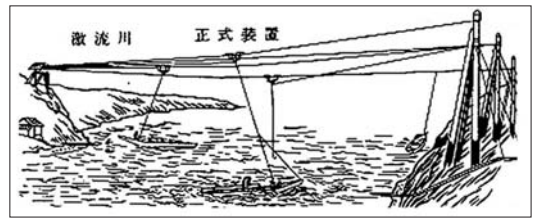
大正末期に登場した大正丸は、長さ一五m、中三

mの大型船。この頃から岡田式渡船が行われるようになりました。岡田式渡船とは両岸に丈夫な柱を立て、その間にワイヤーロープを張って特殊な滑車で船を繋ぎ、舵によって流水の力を利用して進む方式です。この方法を採用することにより、増水したときでも安全に川を渡るこ

とができるようになったのです。

古くから山口は対岸の坂下と結びつきが深く、渡船は人々の暮らしに深くかかわっていました。しかしいったん大雨が降り増水すると渡船は中止され、夜間もまた航行されません。したがって無医村だった山口では、急病人が出て医者にかかれないうなど、不便なことがいろいろとありました。

明治二十四年から四一年間、村営または県営の渡船として活躍してきましたが、昭和七年(一九三二)弥栄橋が完成することにより、その歴史に幕を降ろし



岡田式渡船(岐阜県史通史編近代下より)

ました。

黍生の木曽川左岸に残る渡船場に至る道の跡や石垣、安全祈願した水神さまなどに、往時の賑わいをしのぶことができます。

長年の悲願を叶えた弥栄橋

木曽川に橋を架けることは山口地区にとつて、長年の悲願でした。大正一一年(一九二二)当時の山口村の村長は、木曽川水系の配電事業をしていた大同電力株式会社と折衝し、公共事業に相当額の寄付をするとの約束を取りつけました。寄付金は一万円。黍生の渡船場に橋を架けるための費用の一部となりました。以後村は繰り返し繰り返し、岐阜県・長野県に陳情した結果、昭和六年(一九三二)ようやく両県の協議が整い、着工の運びとなりました。同年八月に工事は開始され、昭和七年三月に弥栄橋は完成しました。

幅員は六m。当時としては超一級の鉄橋で、この橋の完成により山口の人々は川止めの不安から開放され、安心して便利な暮らしを過ごすことができるようになった。

祝賀会は五月八日。川止めにあった無医村の苦しさを涙声で淡々と述べられた当時の山口村の稲葉村長の祝詞に参列者は感激し、すすり泣きの声がもれたといえます。

橋柱には島崎藤村の筆になる「いやさかばし」の銅版がはめ込まれました。両

町村がますます栄えることを願い、藤村が橋の名を命名しています。藤村が揮毫した貴重なものでしたが、戦時中の金属回収で失われました。

新弥栄橋完成

山口の住民の悲願が実り、架橋された弥栄橋ですが、風雪にさらされて老朽化が進むようになりました。昭和五五年(一九八〇)には路面がぼろぼろ陥没したこともあり、昭和五七年より通行車両の重量が一〇tに規制されました。

建設当初は主に山口の人々にとって重要なた弥栄橋ですが、道路交通が主体の時代にあつて、右岸の坂下にとつては対岸の国道一九号につながる生命線ともいべきより重要な橋となっており、大型車に頼る木材業界をはじめ産業・観光に大きな衝撃を与えました。

このため、平成二年度より弥栄橋の架替事業に着手し、平成七年三月には新弥栄橋は完成しました。旧弥栄橋は住民に惜しまれながらも、その役目を終えました。



旧弥栄橋

参考文献

『山口誌上下巻 平成七年山口村誌編集委員会』

気ままに
JOURNEY

中津川市
山口・馬籠地区

文人墨客たちの

心のふるさとを歩く

島崎藤村の生まれ故郷であり、東山魁夷が心のふるさとと慕った山口・馬籠。今なお多くの人に読み継がれる不朽の名作を生みだし、画家としての歩むべき道を決心させた。この地の魅力とはいったいなんだとしたのでしょうか。文人墨客に愛された山間の里へ、深い森林地帯を貫く一筋の街道を歩きました。

水と緑におおわれた 木曽路の南玄関口。

中央自動車道・中津川インターを降り、国道一九号を一路北へ。沿道をにぎわせていたお店は徐々に減り、喧噪とバトンをタッチするかのようになに役はいししか深い山々に変わっていました。

多くの文人墨客に愛された山間の里、山口・馬籠。木曽路の南の玄関口にあたるこの地は、牧歌的な農業地帯が続く山口と、中山道の宿場町を有する観光地の馬籠に大きく分けられます。

最初に目指したのは、木曽一宿の一つである馬籠宿。落合沖田の交差点を右に折れ、県道七号から左にそれてしばらく進むと、中山道の路傍に「是より北木曽路」の石碑が静かにたたずんでいます。頬をなでるひんやりとした風が、美濃路から木曽路に入ったことを知らせてくれているようでした。馬籠宿へは、そこからさら

に2km余り。丸山坂を下ると、全長1kmほどの小さな宿場町が目の前に現れました。狭い中山道の両側には、真つ黒な板壁の木造建築が軒を連ねており、人馬が歩きやすいようにと敷き詰められた石畳も当時の面影そのまま。緩やかな傾斜が続く坂道をゆつくりとのぼりながら、旅人たちもこうして額に汗にじませて歩いたのだろうか、と往時に思いを馳せました。



是より北木曽路の碑

名作の舞台を歩く 馬籠宿の粋な歩き方

— 木曽路はすべて山の中である。あるところは岨つたいに行く崖の道であり、あるところは数一〇間の深さに臨む木曽川の岸であり、あるところは山の尾を巡る谷の入り口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いていた。（島崎藤村「夜明け前」より）



晩年の島崎藤村

中山道のなかでもとりわけ険しい木曽路。島崎藤村はその著「夜明け前」の書き出しで、木曽路の厳しくも雄

大な自然の情景を事に表現しています。そう、ここは島崎藤村のふるさと。馬籠宿の魅力はこの明治の文豪なくして語ることはできません。



清水屋資料館

明治五年（一八七二）三月二三日、藤村は馬籠宿で代々本陣、庄屋、問屋を兼ねていた島崎家の四男として生まれました。木曽路きつての名家に育ち、学問と自然に囲まれて伸びやかな少年期を過ごした彼は、数え年で二〇歳の時に上京。明治学院卒業後、教鞭を執るかたわら文学活動に励み、「破戒」で作家としての地位を確立しました。馬籠宿が多くの人を惹きつけてやまないのは、ここに藤村が愛し描いたふるさとが、そのままの姿で広がっているからでしょう。藤村の小説を片手に名作の舞台を旅してみるのも馬籠の粋な歩き方。往時を偲ぶだけではない、ひと味もふた味も違う馬籠に出会えるはずですよ。

敵の侵入を防ぐために設けられた軍事的な構造「柵形」を過ぎ、ほどなく右手に見えてきたのが「清水屋資料館」で

す。ここは、島崎家とともに宿役人を勤めた原家、藤村の作品「嵐」のなかで当家八代目が「森さん」として登場し、館内には藤村の書簡や宿場の古文書などが展示されています。次に赴いたのが、島崎家の菩提寺であり、「夜明け前」でも万福寺の名前で登場している永昌寺。小丘にある寺は、街道のにぎわいをそよそよと静まり返っており、左手の杉木立には島崎家の墓があります。藤村の遺骨は終焉の地、神奈川の地福寺に埋葬されているため、ここには遺髪と爪が埋められているだけです。藤村の父母・正樹夫妻の墓が静かに村を見守っていました。



島崎正樹の墓



島崎藤村の墓

我が身をかけて山林解放を 訴えた藤村の父・正樹

島崎藤村の父・正樹は「夜明け前」の主人公である青山半蔵のモデルとなつたことで知られています。明治新政府の支配に抗い、座敷牢に幽閉されて一生

旧・山・口・村・の・歳・時・記

◆ふるさと馬籠ごへ祭り 馬籠10月30日◆

色づく山々をバックに開かれる市民参加型の祭。メイン会場となるふれあい広場では、多彩なイベントが催されるほか、ごへもちや地元農産物、特産物の販売が行われます。



◆花馬まつり 山口諏訪神社7月27日◆

豊作と家内安全を祈願する活気あふれる祭。色とりどりの短冊を山車に付けて境内を巡回した後、一斉に短冊を奪い合います。周辺地域でも同様の祭が見られますが、諏訪神社が先駆けと言われています。



旧山口村 EVENT INFORMATION

■ 藤村生誕祭	2月17日
■ 愛宕山祭り	3月第4日曜日
■ 栗島神社祭り	4月3日
■ 山口諏訪神社花馬まつり	7月27日
■ 馬籠盆おどり大会	8月14日～16日ごろ
■ 藤村忌	8月22日
■ 峠の熊野神社例祭	9月第3土・日曜日
■ 神坂諏訪神社秋祭り	10月第1土・日曜日
■ ふるさと馬籠ごへ祭り	10月最終日曜日
■ 藤村記念館落成記念日	11月15日
■ 荒町の梵天山・甘酒祭り	11月第3日曜日



●交通のご案内●

◆名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋IC 東名・中央自動車道 (約60分) 中津川IC 国道19号 (約20分)

◆名古屋方面から公共交通機関をご利用の方

名古屋駅 JR中央本線 (約70分) 中津川駅 濃飛バス (約30分)

●お問い合わせ●

◆中津川市山口総合事務所◆
〒508-0501 岐阜県中津川市山口1605-1
TEL0573-75-2126 FAX0573-75-2131

中津川市山口・馬籠地区



藤村記念館

を終える半蔵の壮絶な生き様は、正樹と瓜二つといっても過言ではありません。正樹が新政府に訴えたのは「山林解放」。馬籠宿本陣の最後の当主として、山の暮らしを守ろうと我が身を挺して懸命に闘いましたが、その願いは届かず失意のうちに運動から身を引くこととなります。正樹の故郷への熱い想いを感じながら、鳥と虫の鳴き声だけが響く墓所を後にしました。

藤村ゆかりの地をめぐる旅もいよいよクライマックス。向かったのは「藤村記念館」です。ここは、島崎親子が暮らした馬籠本陣のあった場所。明治二八年（一八九五）の大火で本陣は焼失してしまいましたが、昭和二年（一九四七）、藤村を慕う村の若者たちによって記念館が建てられました。門の奥の白壁には「血につ

ながるふるさと、心につながるふるさと、言葉につながるふるさと」との藤村の言葉が記されており、館内には「夜明け前の著作原稿、詩集など、五千点余の資料が展示されています。また、馬籠宿のメインストリートを抜けると、隣の妻籠宿までは厳しい坂道の連続。中山道は皇女和宮が降嫁された姫街道としても有名ですが、くねくねと曲がりくねった山道は、人馬の往来・継立てに苦労した様が容易に想像できます。江戸末期の建物が残る「峠集落」は、牛方衆の多かったところで、標高八〇一mの「馬籠峠」には昔ながらの茶屋が今も健在。西の方へ目をやると、恵那山のふもとに美濃の平野が広がり、在りし日の正樹や藤村が眺めたであろう風景は、いくつもの時代を経てなお、



馬籠峠の碑

変わらぬ美しさを見せてくれました。東山魁夷が描く「心のふるさと木曽路」。島崎藤村とともに木曽路を語る上で欠かせない人物がもう一人。日本画の巨匠、東山魁夷です。のちに「心のふるさと」と慕うまでになった木曽路との出会いは、東京美術学校在学中のとき。友人とともに木曽路を旅した彼は、賤母の山林で大夕立に遭い、麻生の村はずれの民家に駆け込んで、一夜の宿を求めたそうです。その時の手厚いもてなしに感動し、木曽の人々の素朴な生活と雄大な自然に心を打たれた魁夷は、この旅がきっかけとなって風景画家としての道を歩むことを決心。平明でありながら深い情感がたたえた風景画からは、心のふるさとに寄せる清らかな美しい自然のイメージ



東山魁夷

東山魁夷が描く心のふるさと木曽路

島崎藤村とともに木曽路を語る上で欠かせない人物がもう一人。日本画の巨匠、東山魁夷です。のちに「心のふるさと」と慕うまでになった木曽路との出会いは、東京美術学校在学中のとき。友人とともに木曽路を旅した彼は、賤母の山林で大夕立に遭い、麻生の村はずれの民家に駆け込んで、一夜の宿を求めたそうです。その時の手厚いもてなしに感動し、木曽の人々の素朴な生活と雄大な自然に心を打たれた魁夷は、この旅がきっかけとなって風景画家としての道を歩むことを決心。平明でありながら深い情感がたたえた風景画からは、心のふるさとに寄せる清らかな美しい自然のイメージ

ジがありありと伝わってきます。東山画伯から二百点を越える版画作品の寄贈を受け、その展示施設として平成七年にオープンしたのが「東山魁夷心の旅路館」。「道の駅 賤母の一角」に設けられた、森のなかの静かな版画館です。木曽川に沿って国道一九号を北上し、乙姫岩や諏訪神社を歩き過ぎてさらに直進すると、緩やかなカーブの先に中山道の集落を彷彿とさせる道の駅の建物が見えてきます。ここには、ごへもちやそばなど郷土料理が楽しめるレストラン「ナー」や地元特産品の販売コーナーもあり、馬籠見物の合間に立ち寄るのにもぴったり。日本画の巨匠が描く心のふるさとに会いに、木曽路のおいしさを味わいに、ぜひとも足を伸ばしてみてください。スポットです。



東山魁夷 心の旅路館

御手伝普請

第一編

御手伝普請の変遷とその特性

江戸時代の治水

江戸時代の治水工事を大別すると、幕府が全部または一部の費用を負担する「御普請」と大名や領民によって実施される「自普請」があります。「御普請」は大きな災害が生じたときに臨時に行われた治水工事で、幕府領・私領ともに実施される公儀普請、国役金をもつて実施される国役普請、普請を特定の大名に手伝わせる御手伝普請があります。

「御普請」の中には「御救い普請」と呼ばれるものがありました。御救い普請とはその名が示す通り、住民の経済的救済が目的の一つでした。災害などを罹災した人々を積極的に雇用し賃金を支払うことで、救済を図っていました。

「自普請」には領主が実施する領主手限自普請と領民が実施する百姓自普請があります。

御手伝普請の歴史

御手伝普請は、幕府の命を受けた大

名が自領とは全く関係のない地域の治水工事について工事費用等を負担して御手伝をすることです。

江戸幕府成立前後には文禄三年（一五九四）の利根川の付替や慶長十四年（一六〇九）に完成した木曾川の御囲堤など、幕府の体制が整っていない段階での普請が数多く存在します。

慶長七年（一六〇二）、三河国松平主殿頭忠利が駿河国富士川の普請を行なっています。江戸幕府成立直後の慶長九年（一六〇四）にも、松平忠利が三河国矢作川で治水工事を行なっています。しかし、これらは徳川家康の命による普請であり、御手伝普請とは性格を異にしています。

全国的な御手伝普請として、宝永元年（一七〇四）、高知藩（高知県高知市）・広瀬藩（島根県安来市）・人吉藩（熊本県人吉市）・秋田藩（秋田県秋田

市）による利根川・荒川の普請が行われました。宝永元年は水害の年。利根川一帯は広域にわたって罹災したため、その災害復旧として実施されました。宝永五年（一七〇八）の相模国川々の普請では、岡山藩（岡山県岡山市）を

じめ、小倉藩（福岡県北九州市）・鳥取新田藩（鳥取県岩倉町）等が御手伝大名となつています。

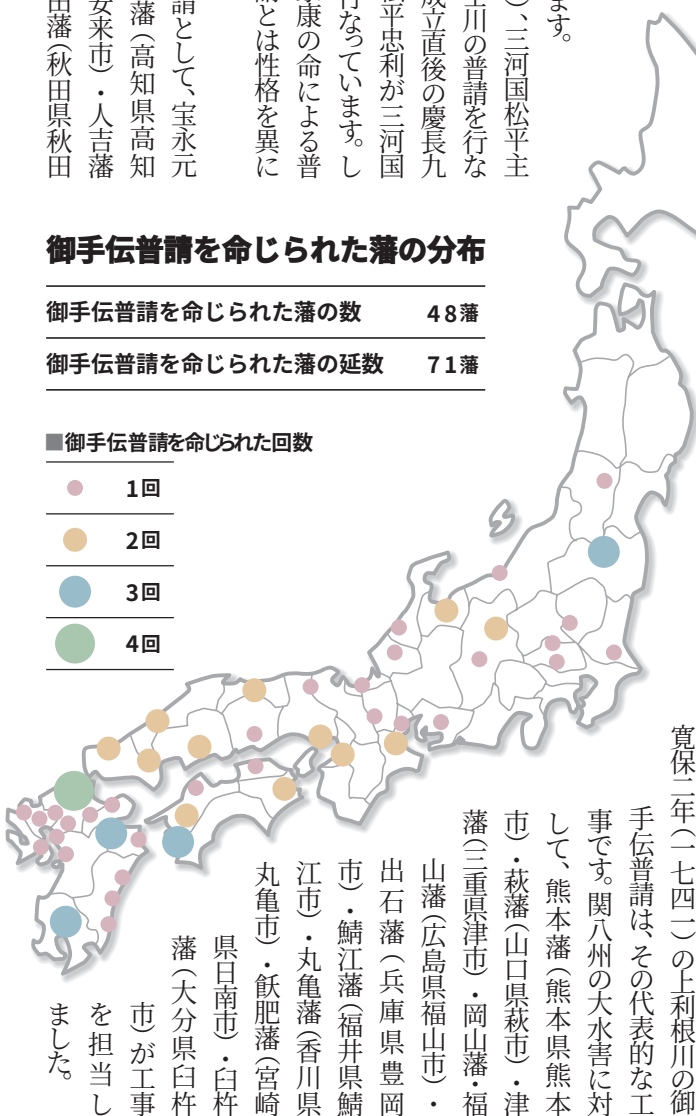
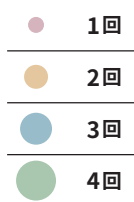
宝永年間に多く実施された御手伝普請は、その後しばらく実施されませんでした。寛保年間以降再び行われるようになりました。

徳川家康が統一政権を樹立した江戸時代、封建制度の軍役にあたる課役として、治水事業が実施されるようになりました。国役普請や御手伝普請がそれです。中でも御手伝普請は、幕府が本来なすべき川普請を、大名が代って実施するものです。木曾川水系で行われた御手伝普請は一六回。今回からシリーズで御手伝普請を特集します。

御手伝普請を命じられた藩の分布

御手伝普請を命じられた藩の数	48藩
御手伝普請を命じられた藩の延数	71藩

■御手伝普請を命じられた回数



寛保二年（一七四二）の上利根川の御手伝普請は、その代表的な工事です。関八州の大水害に対して、熊本藩（熊本県熊本市）・秋藩（山口県秋市）・津藩（三重県津市）・岡山藩・福山藩（広島県福山市）・出石藩（兵庫県豊岡市）・鯖江藩（福井県鯖江市）・丸亀藩（香川県丸亀市）・飯沼藩（宮崎県日南市）・白杵藩（大分県杵臼市）が工事を担当しました。

延享四年（一七四七）には、二件の御手伝普請がありました。鳥取藩（鳥取県鳥取市）による申斐国の川普請と二本松藩（福島県二本松市）による木曽川の御手伝普請です。

木曽三川下流域の複雑な領地関係

江戸時代に入って、全国的に新田開発が行なわれると、従来の洪水氾濫域として放置されていた沖積地帯が水田として開発され、その結果、水害が増加します。それは木曽三川下流域も同様です。木曽川・長良川・揖斐川が乱流し、三川をつなぐ支派川が網の目のように流れる下流域一帯では、洪水のたびに堤防決壊、浸水、そして家屋田畑流失の被害に悩まされ続けていました。

しかし、木曽三川下流域の複雑な領地関係は、地域全体として治水問題に

対処することを難しくしていました。徳川御三家の一つ、尾張藩が尾張国一円を領有していたのに対し、美濃国では多数の領主が存在していたためでした。

総石高六〇余万石の美濃国は約二〇万石の幕府直轄領、約一五万石の尾張藩領、残りの二五万石程度を、大垣藩・高須藩など一〇藩に及ぶ諸大名領と、七〇余の旗本領に細分され、しかも領地は錯綜していました。

例えば、木曽川と揖斐川にはさまれていた海津市海津町域には、高須藩が置かれていましたが、その領地関係を正保二年（一六四五）『美濃国郷帳』で見えますと、約七％が尾張藩領、約五九％が幕府直轄領・旗本領で、高須藩領はわずかに約三四％に過ぎませんでした。

こうした多数の領主の存在は、利害関係を複雑にし、水害の復旧や地域の排水など、一貫した治水事業の実施を

難しくしていたのです。

笠松郡代と高木三家

木曽三川下流域の直轄領の治水工事を掌っていたのは、美濃郡代です。美濃奉行大久保石見守長安の後を継いだ岡田将監善同は揖斐郡に陣屋を構え、その子善政は父の役職を引き継ぎ、陣屋を可兒郡徳野村に移しましたが、その後、郡代・名取半左衛門長知が、笠松に移転させたため、笠松郡代ともよばれていました。宝暦治水の原案を作成した井沢弥惣兵衛為永は第九代の郡代として享保二十年（一七三五）から約二年間務めています。

美濃郡代により直轄領の治水工事は行われ、河川管理は、多良（上石津町）に陣屋を置く旗本・高木三家が担当していました。高木三家は後に水行奉行に任じられ、河川管理とともに治水工事の監督・統制の役割を担うようになりました。

木曽三川下流域の御手伝普請

領地が複雑に入り組む木曽三川下流域では、大きな水害が発生しても個々の領主単位で治水事業を行うことは不可能でした。そのため、流域民は再三にわたって、幕府に治水を訴願しています。こうした住民の切実な願いに応えて行われたのが、御手伝普請です。

美濃郡代と高木三家は、木曽三川下流域で実施された御手伝普請において

も工事の監督にあたっていました。木曽三川における御手伝普請の始まりは、延享四年（一七四七）、二本松藩に命じた治水工事です。

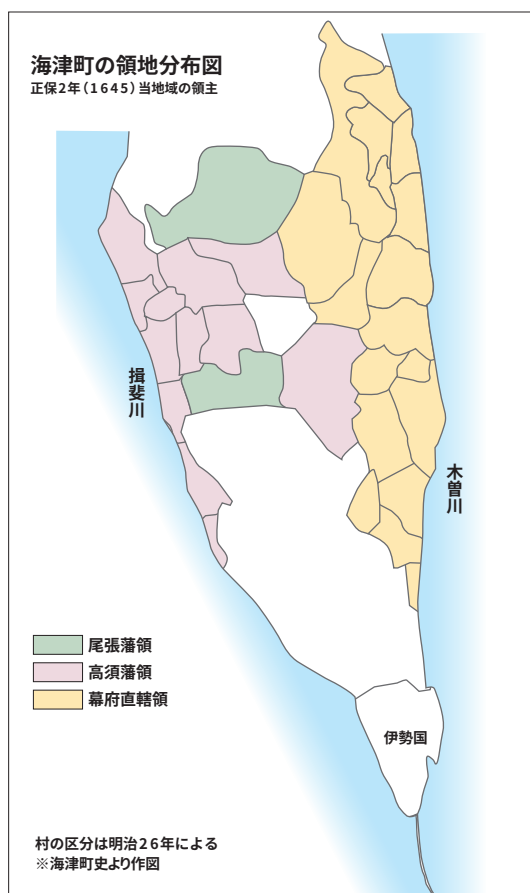
以後、木曽川の御手伝普請は幕末の文久元年（一八六一）まで一六回にわたって実施されました。この間一四年間、平均すると七年強に一度の御手伝普請が実施されたことになります。中でも寛政八年（一七九六）から文化二年（一八〇五）までの九年間には、五回も御手伝普請が実施されていることが注目されます。

普請御手伝を命じられた藩は、北は新庄藩（山形県新庄市）から南は薩摩藩（鹿児島県鹿児島市）まで四八藩、延べ七一藩に及んでいます。幕末における藩の総数は二八〇藩といわれていますから、単純計算では、全国の一七％もの藩が木曽川の御手伝普請に係わったこととなります。

これを現在の県別でみると全国では三〇県六〇％の県が関係しています。特に九州・中国では全県が関係しています。

四回の普請御手伝 小倉藩

御手伝普請を命じられた藩を地方別にみると、九州地方が最も多く一六藩、延べ二三藩にのぼっています。その中で小倉藩は、天明三年（一七八三）、文化二年（一八〇五）、文化三年（一八一六）、そして天保七年（一八三六）と四回も御



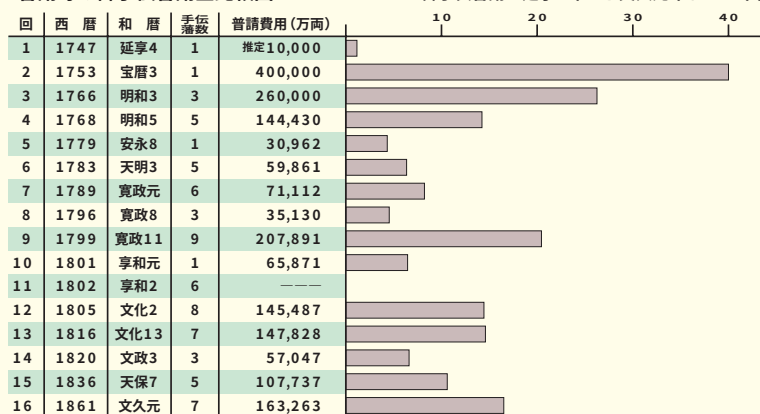
一藩単独での
御手伝普請が四回

手伝普請を命じられています。そのほか九州地方では薩摩藩と岡藩(大分県竹田市)が三回です。木曾川における最初の御手伝普請を行った二本松藩は寛政元年(一七八九)と寛政八年(一七九六)にも御手伝普請を命じられ、御手伝は三回に及んでいます。また、宇和島藩(愛媛県宇和島市)も御手伝普請は三回に及んでいます。

そのほか二回の普請御手伝を命じられた藩は秋藩など二二藩にもあります。

一藩による御手伝普請が異例とされるなかで、木曾川では二本松藩による延享四年(一七四七)普請、薩摩藩による宝暦三年(一七五三)普請、鳥取藩による安永八年(一七七九)普請、そして広島藩(広島県広島市)による享和元年(一八〇一)普請と、一藩単独による普請御手伝が実施されています。

普請毎の御手伝普請金比較図



※普請費用の(――)は不明

4回普請藩

備前 小倉藩
福岡県北九州市

3回普請藩

岩代 二本松藩
福島県二本松市

伊予 宇和島藩
愛媛県宇和島市

豊後 岡藩
大分県竹田市

薩摩 薩摩藩
鹿児島県鹿児島市

木曾川で初めて複数藩による御手伝普請が実施されたのは明和三年(一七六六)の萩藩・小浜藩(福井県小浜市)・岩国藩(山口県岩国市)の三藩による御手伝普請でした。最も藩数の多かった御手伝普請は寛政一年(一七九九)の普請で津藩など九藩による御手伝が実施されています。一回当りの普請御手伝額は、薩摩藩による宝暦三年(一七五三)普請が四〇万両と突出しており、次いで明和三年(一七六六)の萩藩な

御手伝普請の実施時期	国 名	藩 名	藩主名	現在の市町村名	藩石高(石)	御手伝金額(両)	御手伝の内容
享和の御手伝普請 享和2年(1802)	加 賀	大聖寺	前田松平飛騨守利考	石川県加賀市	70,000	—	お金御手伝100%
	讃 岐	丸 亀	京極能登守高中	香川県丸亀市	51,500		
	日 向	佐土原	島津淡路守久柄	宮崎県佐土原町	27,000		
	肥 前	蓮 池	鍋島甲斐守直温	佐賀県佐賀市	52,600		
	肥 後	高 瀬	細川能登守利康	熊本県玉名市	35,000		
	阿 波	徳 島	蜂須賀松平阿波守治昭	徳島県徳島市	257,000		
	武 蔵	川 越	松井松平大和守直恒	埼玉県川越市	100,000		
文化の御手伝普請 文化2年(1805)	豊 前	小 倉	小笠原伊予守忠国	福岡県北九州市	150,000	145,487	お金御手伝100%
	豊 後	岡	中川修理大夫久貴	大分県竹田市	70,400		
	和 泉	岸和田	岡部左膳長慎	大阪府岸和田市	50,000		
	伊 予	松 山	久松松平立丸定則	愛媛県松山市	100,000		
	豊 後	中 津	奥平大膳大夫昌高	大分県中津市	100,000		
	常 陸	土 浦	土屋保三郎寛直	茨城県土浦市	95,000		
	下 野	足 利	戸田松平大隅守忠喬	栃木県足利市	12,000		
	薩 摩	薩 摩	島津松平豊後守齊興	鹿児島県鹿児島市	778,000		
文化の御手伝普請 文化13年(1816)	伊 予	宇和島	伊達遠江守村寿	愛媛県宇和島市	100,000	147,828	お金御手伝100%
	筑 後	柳 河	立花左近将監鑑寿	福岡県柳川市	29,600		
	豊 前	小 倉	小笠原大膳大夫忠国	福岡県北九州市	150,000		
	武 蔵	忍	阿部鉄丸正権	埼玉県行田市	100,000		
	肥 前	島 原	深溝松平主殿頭忠馮	長崎県島原市	70,000		
	信 濃	上 田	藤井松平伊賀守忠学	長野県上田市	53,000		
	長 門	萩	毛利松平大膳大夫齊熙	山口県萩市	369,000		
文政の御手伝普請 文政3年(1820)	石 見	浜 田	松平左近将監鑑寿	島根県浜田市	60,400	57,047	お金御手伝100%
	周 防	岩 国	吉川監物経礼	山口県岩国市	60,000		
	豊 前	小 倉	小笠原大膳大夫忠国	福岡県北九州市	150,000		
天保の御手伝普請 天保7年(1836)	伊 予	宇和島	伊達遠江守宗紀	愛媛県宇和島市	100,000	107,737	お金御手伝100%
	安 芸	広 島	浅野松平安芸守齊肅	広島県広島市	426,000		
	三 河	岡 崎	本多上総守忠民	愛知県岡崎市	50,000		
	安 芸	広島分家	浅野松平美作守長訓	広島県安芸高田市	30,000		
	播 磨	明 石	池田松平兵部大輔慶憲	兵庫県明石市	80,000		
文久の御手伝普請 文久元年(1861)	伊 勢	津	藤堂和泉守高献	三重県津市	323,950	163,263	お金御手伝100%
	薩 摩	薩 摩	島津松平修理大夫茂久	鹿児島県鹿児島市	770,000		
	石 見	浜 田	松平右近将監武聡	島根県浜田市	61,000		
	越 後	高 田	榊原式部大輔政恒	新潟県高田市	150,000		
	越 中	富 山	前田松平稠松利同	富山県富山市	100,000		
	伊 勢	久 居	藤堂佐渡守高邦	三重県久居市	51,000		



長州藩士治水顕彰碑

長州藩士治水顕彰碑が建立されています。そして、岐阜県と鹿児島県は昭和四四年姉妹県として、また、

明和以前の御手伝普請においては多くの藩士達が、普請に従事するため木曾三川流域にきています。厳しい普請の中で地域の人々との間に様々な交流がはかられたことが想像されます。薩摩藩による宝暦治水に対しては、油島締切堤の治水神社や宝暦治水碑の建立など、宝暦治水顕彰会による活動が続いています。また、明和三年の萩藩等による明和治水に対しては岐阜市の長良川左岸の四ッ屋公園に「長州藩士治水顕彰碑」が建立されています。

御手伝普請を縁とする地域交流

などによる御手伝が二六万両となっています。この普請以降、普請金のみを支出するお金御手伝へと内容が変化しています。寛政一二年（一七九九）の津藩など九藩による御手伝普請で二〇万七千八百九一両、次いで最後の御手伝普請となった文久元年（一八六一）においては七藩が御手伝を命じられ、費用は一六万三千二百六十三両でした。



宝暦治水碑

ます。

桑名市は江戸時代の藩主の縁で埼玉県行田市（忍藩、福島県白河市（白河藩、新潟県柏崎市（高田藩）との交流が続いています。忍藩と高田藩は御手伝普請の命を受けた藩です。二本松藩が属する福島県には会津藩があり、会津藩主松平容保は、高須藩主松平義建の六男で、当時の桑名藩主松平定敬、尾張藩主徳川慶勝と兄弟の関係にあります。※藩名については、所在地名を原則としています。が、鹿児島藩は薩摩藩としています。

- 参考文献
- 『近世日本治水史の研究』昭和六一年 著者 大谷貞夫 雄山閣
- 『木曾三川流域誌』平成四年建設省（現国土交通省）
- 『岐阜県治水史』上巻 昭和五十六年 岐阜県
- 『木曾三川明和治水の概要』丸山幸太郎著『海津町史』上巻 昭和五十八年海津町（現海津市）

御手伝普請の時期と御手伝を命じられた藩

御手伝普請の実施時期	国名	藩名	藩主名	現在の市町村名	藩石高(石)	御手伝金額(両)	御手伝の内容
延享の御手伝普請 延享4年(1747)	岩代	二本松	丹羽若狭守高庸	福島県二本松市	100,000	推定10,000	町方請負100%
宝暦の御手伝普請 宝暦3年(1753)	薩摩	薩摩	島津松平薩摩守重年	鹿児島県鹿児島市	770,800	400,000	町方請負 2%
明和の御手伝普請 明和3年(1766)	長門	萩	毛利松平大膳大夫重就	山口県萩市	369,000	260,000	町方請負 80%
	若狭	小浜	酒井修理大夫忠実	福井県小浜市	103,558		
	周防	岩国	吉川監物経倫	山口県岩国市	60,000		
明和の御手伝普請 明和5年(1768)	阿波	徳島	蜂須賀松平阿波守重喜	徳島県徳島市	257,900	144,430	お金御手伝100%
	豊後	岡	中川修理大夫久貞	大分県竹田市	70,440		
	筑後	久留米	有馬中務大輔頼隆	福岡県久留米市	210,000		
	伊予	大洲	加藤遠江守泰武	愛媛県大洲市	60,000		
	筑前	秋月	黒田豊松長恵	福岡県甘木市	50,000		
安永の御手伝普請 安永8年(1779)	因幡	鳥取	池田相模守重寛	鳥取県鳥取市	320,600	30,962	お金御手伝100%
天明の御手伝普請 天明3年(1783)	豊前	小倉	小笠原左京大夫忠総	福岡県北九州市	160,000	59,861	お金御手伝100%
	日向	延岡	内藤備後守政脩	宮崎県延岡市	70,000		
	和泉	岸和田	岡部美濃守長備	大阪府岸和田市	53,000		
	越前	丸岡	有馬大之進普純	福井県丸岡市	50,000		
	但馬	出石	仙台兵部少輔久行	兵庫県豊岡市	30,000		
寛政の御手伝普請 寛政元年(1789)	岩代	二本松	丹波加賀守長貴	福島県二本松市	100,700	71,112	お金御手伝100%
	豊後	岡	中川修理大夫久貞	大分県竹田市	70,440		
	豊後	臼杵	稲葉能登守弘通	大分県臼杵市	50,060		
	越中	富山	前田松平出雲守利謙	富山県富山市	100,000		
	信濃	上田	藤井松平伊賀守忠清	長野県上田市	53,000		
	肥前	唐津	水野左近将監忠鼎	佐賀県唐津市	60,000		
寛政の御手伝普請 寛政8年(1796)	播磨	明石	池田松平左兵衛佐直周	兵庫県明石市	80,000	35,130	お金御手伝100%
	肥前	小城	鍋島麟太郎直知	佐賀県小城市	73,200		
	岩代	二本松	丹羽左京大夫長祥	福島県二本松市	100,700		
寛政の御手伝普請 寛政11年(1799)	伊勢	津	藤堂和泉守高嶺	三重県津市	323,950	207,891	お金御手伝100%
	因幡	鳥取	池田松平鑑之進齊邦	鳥取県鳥取市	320,000		
	出羽	新庄	戸沢富寿正胤	山形県新庄市	68,200		
	伊予	大洲	加藤遠江守泰清	愛媛県大洲市	60,000		
	伊予	宇和島	伊達遠江守村寿	愛媛県宇和島市	100,000		
	日向	既肥	伊東綿三郎祐民	宮崎県日南市	51,000		
	信濃	松本	戸田松平丹波守光行	長野県松本市	60,000		
	備前	岡山	池田松平上総介齊政	岡山県岡山市	315,000		
	近江	膳所	本多隠岐守康完	滋賀県大津市	60,000		
享和の御手伝普請 享和元年(1801)	安芸	広島	浅野松平安芸守齊賢	広島県広島市	426,000	65,871	お金御手伝100%

※出典:岐阜県治水史を加筆修正 (宝暦・明和の普請費用の町方請負率は、施工数量により推定した値である)



木曽三川の流れとともに

桑名市長 水谷 元氏



水谷 元氏

略歴
昭和31年生
昭和63年11月～平成7年12月
三重県議会議員(3期)
平成8年1月～平成16年12月
桑名市長(3期)
平成16年12月～
桑名市長(桑名市・多度町・長島町合併による新市)

桑名と水運

桑名は木曽三川とともに歩んできたと言っても過言ではありません。

桑名が日本史上最初に登場するのは『日本書紀』の壬申の乱の時(六七二年)で、桑名に留まっていた大海人皇子は、高市皇子の要請によって不破関へ移動したとあります。移動は「即日」(その日の内)に行われており、移動手段が、船を利用したという説もあります。ま

た、八二二年には、舟運があるので、伝馬の設置を止めてほしいと朝廷へ訴えています。これらの記述から、木曽三川は早くから舟運が発達していたと推定されます。

桑名は、川舟で運ばれてきた物資を一旦荷揚げし、海船に乘せ替えて各地へ運ぶ拠点となったため、「十桑の津」と呼ばれ栄えました。江戸時代においても、交通の要衝として東海道の宿駅に指定されました。また、桑名と宮の間は



六戦國志 古川古松軒作「尾州小牧長久手御合戦地図」(桑名博物館蔵)

東海道唯一の渡海「七里の渡」となり、桑名から佐屋までは木曽三川を通る「佐屋の渡(三里の渡)」も制定されました。

地理的要件は大きく、生活面や風俗・習慣でも色々な違いがあります。特に言葉のアクセントは川を越えると全く違います。同じ桑名市でも揖斐・長良川で隔てられた長島との会話では「柿」のつもりで話していたら相手は「牡蠣だ」と思っているという笑い話がよくあります。

木曽三川の縁

木曽三川



焼蛤(伊勢参宮名所図会)

は、物資だけではなく、人や文化ももたらしました。中世には連歌師宗長や宗硯が全国屈指の湊としての桑名の様子を記した紀行文を残しています。近世には沢庵宗彭・井原西鶴・松尾芭蕉・頼山陽・歌川広重などが俳句・詩歌・小説・浮世絵などに桑名を描いています。そして、『東海道中膝栗毛』で桑名の蛤は全国版となり、『東海道名所図会』や浮世絵で七里

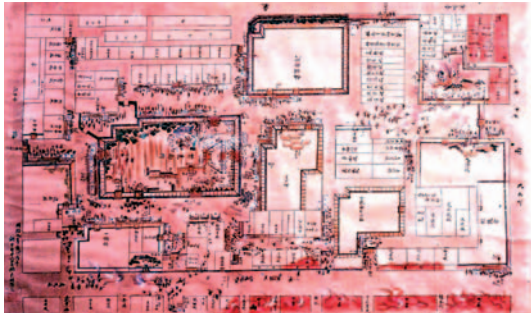
の渡、桑名のイメージが出来上がりました。



末広五十三次「桑名」芳年作(桑名博物館蔵)

芭蕉や山陽は舟で大垣から桑名に下って名文を残しています。高須などを經由して揖斐川を利用するこの航路は明治の改修工事まで健在でした。また、木曽川を笠松まで行くルート、長良川を竹ヶ鼻に行くコースなどがありました。長島は大島が主たる川湊で、七里の渡の他、佐屋や桑名や木曽岬などへ渡し設けられており、流域の交流が活発であったことが推測できます。

木曽三川といえば、誰もが思い浮かべるのが「輪中」「長島一向一揆」「宝暦治水」ですが、お手伝普請につきましては、特集が組まれておりますので、詳細は省



元治の乱絵図(蛤御門の変) 鎮国守国神社蔵

きますが、近くは津藩や久居藩、遠くは薩摩藩や出羽新庄藩など多くの藩が命じられており、その中で、奇しくも桑名と深く関わる藩があります。

まず、桑名藩と親戚関係にあった藩としては、四代目藩主松平定行が移封し、また、その孫で七代目桑名藩主となった松平定重の出身である伊予松山藩があります。移封関連では、一四代桑名藩主松平忠亮が移封した忍藩、初代・二代桑名藩主を務めた本多忠勝の子孫の岡崎藩、七代目藩主松平定重が移封し、後に領地の一部が桑名藩領となった高田藩、長島藩主菅沼定芳が移封した膳所藩があげられます。

そして、幕末から明治にかけて桑名と運命的な関わりを持つのが、薩摩藩、長州藩、津藩です。長州征伐・禁門(蛤御門)の変では味方として戦った薩摩藩と桑名藩は、鳥羽・伏見の戦いにおいては

敵となり、長州藩と薩摩藩が手を組み新政府軍の先鋒となりました。津藩は戦いの終盤で新政府軍に付いています。しかし、西南の役の時には、旧桑名藩士は旧藩主の呼びかけに応じて参集し、政府軍として果敢に戦っています。この功

を認められて、というより、戊辰戦争の時から伝説的になっていた戦上手の立見尚文は、明治政府に取り立てられ、旧薩摩旧長州の軍閥にありながら、陸軍大將となりました。

二本松藩は、桑名と直接一緒に戦ったわけではありませんが、奥羽越列藩同盟の一員として、白河城奪回や二本松城の戦いで多くの死傷者を出し、「二本松少年隊」の悲壮な死は、会津白虎隊と共に語り継がれています。

木曾三川地域交流

文政六年(一八二三)桑名藩を震撼させる報せが江戸から早馬でもたらされました。桑名の松平忠亮を忍に、忍の阿部正権を白河に、白河の松平定永を桑名に、という国替えの命令でした。江戸中期以降の国替え、まして、三藩間の大掛かりな国替えは異例です。この背景には松平定信がおり、彼の強い意向を受けての国替えであったといわれます。

国替えは、藩全体が移動しますので、藩の政策の変換は勿論ですが、風俗・習慣や文化にも新しい息吹が吹き込まれ、住民にとっても大きな変革でした。桑名から移封した忍(行田市)では今でも「桑名弁」が聞かれるように、桑名は白河から藩校立教館の名称(立教小学校と教科の一つであった「打毬戯」を伝承しており、漢詩のかたるを取る「詩かるたも白河からもたらされたものです。



松平定敬(鎮国守国神社蔵)

津・桑名に養子に入り、政局を動かす働きをしております。特に京都守護職となった会津の容保と京都所司代となった桑名の定敬は、就任以来行動を共にし、戊辰戦争をともに戦っています。

文政の国替えの縁で、桑名市は行田市(忍藩・白河市と友好都市締結をして交流を続けており、また、今年には、分領地のあった柏崎市と防災協定を結び、戊辰戦争の盟友会津とはエールの交換中です。

また、桑名が十楽の津と呼ばれていた中世から今日まで脈々と受け継がれているものに、伊勢神宮の遷宮毎に木曾から切り出される用材の集散と御木曳きがあります。

遷宮に必要な用材を切り出す御杣山は、室町時代に伊勢から木曾谷(現在の長野県)と裏木曾(現在の岐阜県)に移りました。切り出された御用材は、木曾川まで運ばれ、一本づつ美濃の錦織まで流され、そこで筏に組まれて桑名まで流され、内宮用と外宮用に組み分けられて、更に海上を伊勢大湊まで運ばれました。昭和の始めから陸送に替わってしまいましたが、御樋代木だけは出来るだけ古式に則ったという配慮で、木曾谷

から切り出された御樋代木は、上松町、大県神社(犬山市)、真清田神社(一宮市)を経て桑名の七里の渡へ運ばれます。岐阜県の裏木曾から切り出された御樋代木は、付知町、錦織(八百津町)を経て運ばれます。そして、七里の渡から桑名宗社まで御木曳きが行われ、内宮用と外宮用に組み分けられます。その後御樋代木は、内宮用は五十鈴川を川曳で、外宮用は護国神社(津市)を経て宮川から陸曳で、奉曳団によって運び込まれます。

七里の渡には、江戸から来た時伊勢の国に入って最初にある伊勢神宮の鳥居の意味で江戸時代中頃から「伊勢国一の鳥居」が建立されていますが、遷宮の度に宇治橋北詰外側の鳥居を移築しています。

このように、江戸時代からの縁によって現在の桑名市が有ります。木曾三川流域の地域は、古代から水運を通じて多くの繋がりが築かれていた故事にならって、震災や災害が予測される昨今、木曾三川流域の各自自治体も、水運や川湊の復活によって、観光に視点を置く一方で、橋が利用できなくなったことを想定した防災対策としての面での相互協力・情報の共有などの連携が図られれば、三川流域に住む意義もあると思います。その実現を切望するものです。

※御樋代木：御神体を収めるための器に使用する材。

民話の小箱

童宮乙姫岩の伝説 中津川市山口

雄大な山々に囲まれ、

四季ごとに自然の美しさを見せてくれる山口。

木曽川には大小の奇岩怪石が屹立し、

大変素晴らしい景観です。

中でも一番大きい岩を乙姫岩と呼び、

その周囲にはまるで乙姫に仕えるように、

殿岩・獅子岩・波切岩・亀岩・

振袖岩・伊勢木岩・屏風岩といった

岩が川面に浮かび、見る人々の感動を呼んでいます。

ところは変わり、乙姫岩から遙か上流の上松寝覚

木曽川の激流で削られた巨大な花崗岩はとても壮大で、

まさに自然の彫刻です。

そこには浦島太郎が住んでおり、

毎日釣りをしていました。

ところがある日、大雨が降って川が大増水。

岩の上で釣りをしていた太郎は、

濁流に吞まれてしまいました。

すると不思議なことに岩が生きた亀に変わり、

浦島太郎を乗せ乙姫岩まで流れてゆきました。

流れ着いた太郎を発見し、

介抱をしたのは乙姫岩に住む乙姫。

いつしか、太郎と乙姫は惹かれあつてゆきました。

しかし、太郎は次第に姫との身分の差に悩むようになり、

乙姫を愛するがゆえに別れることを決心しました。

太郎が寝覚へ帰る日、乙姫は

「また会うときまで、この箱を開けずに待っていてください」と玉手箱を手渡しました。

寝覚に帰った太郎は

乙姫のいない淋しさを紛らわすように

暮らしていましたが、

ついに我慢ができなくなり、

玉手箱を開けてしまいました。

すると中から白い煙が立ち上り、

太郎は白髪のおじいさんになってしまったのです。

その後太郎と乙姫が会うことは

二度とありませんでした。

現在の乙姫岩には

乙姫の神が祭られており、

縁結びの神として信仰されています。

また、乙姫岩の岩間から

湧き出す鉱泉は

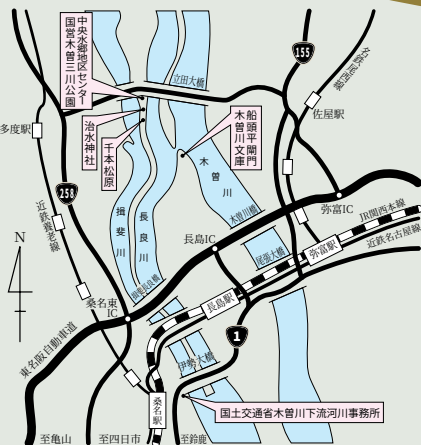
乙姫が入浴に

使用した湯であり、

万病に効果があると言われています。



木曽川文庫利用案内



《開館時間》午前8時30分～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日(月曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋西詰から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・
木曽川文庫

〒496-0947 愛知県

愛西市立田町福原

TEL(0567)24-6233



●表紙写真● 上:木曽川 中左:水車塚 中右:峠の水車 下:乙姫岩と木曽川

編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、中津川市山口・馬籠地区の皆様及び、桑名市長水谷元氏にご協力いただきありがとうございます。お礼申し上げます。

次回は、岐阜県郡上市明宝地区を特集します。ご期待ください。

宛先 「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

木曽川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

『KISSO』Vol.56 平成17年10月発行

発行:国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所 〒511-0002三重県桑名市大字福島465 TEL(0594)24-5715

木曽川下流河川事務所ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu>

制作:財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル) TEL(052)565-1976